

## 文京学院大学における初年次教育に関わる 取り組み事例

森村幸夫  
文京学院大学

### 1. はじめに

本郷キャンパスディレクターの森村と申します。文京学院大学の学生支援と教職協働についてご紹介します。学生が中心に企画・運営している活動については、私が皆さんにご説明した後に、取り組みの当事者である学生に補足してもらおうと思っています。よろしく願いいたします。

最初に発表の構成をご説明しますと、大きく三つに分かれています。一つ目が本学の紹介、二つ目が学生支援の事例紹介、三つ目が取り組みの課題と展望です。

### 2. 文京学院大学の紹介

それでは本学の紹介に入ります。本学の母体は1924年に島田依史子が開設した島田裁縫伝習所で、「自立と共生」を建学の精神とします。1964年に文京女子短期大学、1991年に文京女子大学を開学しました。文京女子大学では経営学部、人間学部、外国語学部、保健医療技術学部というように順次学部を開設。2002年に現校名に改め、05年に全学部を男女共学にしました。2009年に創立85周年を迎え、88周年である今年は、100周年に向けてさまざまな施策を行っています。スライドに2枚写真が載っていますが、上が創立者である島田依史子、下が現在の学園長である島田燐子です。

本学は4学部1短大から成り、学生数は約4,500名。埼玉県のみじみ野キャンパス、今日皆さんがいらっしゃるここ東京都の本郷キャンパスと、二つのキャンパスがあります。

次に、学生支援の取り組みを見ていきましょう。「ボランティアによる被災地支援」「単位不足や欠席の多い学生へのコンタクト・指導」「てっぺんフォーラム」の三つを取り上げます。

### 3. 「ボランティアによる被災地支援」の三つの効果

「ボランティアによる被災地支援」は、これを始めるに至った背景からご説明します。東日本大震災後、本学の学生は自主的にボランティア活動に参加していました。しかし、「被災者の力になりたいけれど、何をしたらよいか分からない」という学生も少なからずおり、そうした学生をサポートするために企画されたのが、この取り組みです。

企画の実践に当たっては、まず職員が被災地を視察して状況を把握。安全性を確認したり、宿泊先を確保したりした上で、学生に告知しました。学生ボランティアは7回に分けて派遣しましたが、どの回も参加希望者が募集人数をはるかに上回りました。また、本学では学生ボランティアを派遣するだけでなく、さまざまな被災地支援を企画しており、2011年度は全19件を実施し、延べ1,044人の学生が参加しました。こうした被災地支援は5年以上続け、瓦礫の撤去といった物理的な支援から心のケアなどの精神的な支援に移行していく予定です。

「ボランティアによる被災地支援」は、学生にとって三つの効果があったと考えています。一つ目は、日本で起きた大震災の被災地を実際に見ることで、自分の在り方や今後の人生について考えるようになったこと。二つ目は、互いに助け合うことの大切さを学べたこと。三つ目は、大学が企画しなくても自分から進んでボランティア活動をする学生が増えたことです。教科の一環ではない、純粋なボランティア活動に熱心に取り組む学生の姿を見て、付き添った私たち教職員は学生の人的成長を感じました。現地視察など手間をかけて準備をしたかがあったと思ったのは、私だけではないはずです。

#### 4. 直接自分の目で見て、聞いて、感じる

学生の自主的なボランティア活動もご紹介しておきましょう。例えば、「ランドセル大作戦」という活動では、東日本大震災で被災した宮城県気仙沼市の子どものためにランドセルを贈りました。本学の環境教育研究センターに所属する学生が各教室にポスターを掲示して活動を告知し、多くの学生の協力を呼びかけました。教育委員会を通して本学近くの小学校にも活動の意図を伝え、卒業生にランドセルを寄贈してほしいとお願いしました。お子さんがランドセルを本学に届けてくれたり、学生が小学校まで取りに行ったりして、大震災発生から1か月足らずの間に集まったランドセルは、全部で1,024個に及びます。学生はその一つひとつを丁寧に拭き、手書きのメッセージを添えて気仙沼市へトラックで運びました。トラックでの搬送には市民ボランティアの方々にも協力していただきました。こうして気仙沼市に届いたランドセルは、市の教育委員会を通して希望者にプレゼントされました。本学には気仙沼市長から感謝状が届きました。

本学で企画した被災地ボランティアでは、活動報告として学生に感想文を書いてもらい、冊子にまとめました。その中から一部をご紹介します。

「このボランティアに参加しなかったら私はこの現実を知ることはなかったかもしれません。メディアや人から聞いた話では限界があります。現地に行き、直接自分の目で見て、聞いて、感じる事が出来たことを自分の人生で生かしていきます」

「私に出来ることは小さく、限られているかもしれませんが。しかし小さくても力になれることも分かりました。そのため今後も小さな力であっても私が出来る限りのことを見つけ、行動できるようにしたいと強く思います」

「帰る家があること、温かいお風呂に入れること、布団で寝られること、ご飯が食べられること、学校に行けること、家族・友達がそばにいること、当たり前を感じている日常生活がどれほど大切なことか改めて実感した。それと同時に自分と関わっている人たちに感謝し1日1日大事に過ごしたい」

こうした感想文からは、被災地でのボランティア活動によって、いかに大きなものを学生が学んだかが伝わってきます。

ただ、問題点や課題点も三つありました。一つ目は、ボランティア活動に対するモチベーションが高い学生と低い学生が混在していることです。そして、どの程度モチベーションがあるかは現地で活動して初めてわかります。この取り組みにもモチベーションの低い学生がおり、現地で非常に残念な思いをしました。問題点・課題点の二つ目は、被災地への「親切の押し売り」にならないように、ボランティア先での立ち居振る舞いについて学生に対する事前説明を徹底したのですが、これに手間と時間がかかったことです。三つ目は、一時的な感動や問題意識の高まりに終わらせないために何をすべきかということです。本学ではボランティア活動に継続して取り組

むことで、学生の問題意識も継続させたいと考えています。

## 5. 単位不足や欠席の多い学生には面談指導

学生支援の取り組みのもう一つの事例は、「単位不足や欠席の多い学生へのコンタクト・指導」です。単位不足や欠席が多いことの原因は、不本意入学、学習意欲の喪失、人間関係の悩みなどがあると考えられます。本学では、履修期間内に履修登録を行わない学生、成績不良学生、欠席が目立つ学生に対して、連絡や面接・指導を行っています。1年生については、履修期間内に履修登録を行わなかったり、必修科目を多く欠席したりする場合に、各学部が電話で学生に連絡し、20～40人と面談を行います。未履修や多欠の原因をつきとめ、解決策を提案しているためか、1年次前期での退学者も減っています。この取り組みの効果としては、学部からの連絡をきっかけに、授業に出席するようになる学生が少なくないことが挙げられます。そのため、退学率の増加抑制に役立っていると言えるでしょう。

一方、問題点や課題点も四つあります。一つ目は、日中は電話が繋がらない学生が多いため、職員の通常の業務時間内では全員への連絡が難しいこと。二つ目は、成績が良くない学生に電話をして保護者が出た時に、どの程度事情を話すべきかということ。三つ目は学納金延滞の場合で、保護者から「子どもには延滞していることは黙っていてほしい」と頼まれるなど、対応が難しいことがあります。四つ目は、学生によっては、課題の解決に相当の時間と労力が必要な場合があることです。

こうした課題や問題を解決するためには、教職員が互いの学生指導についての情報を把握する必要があるので考えています。そこで、経営学部では電子ポートフォリオに情報共有のための機能を組み込みました。電子ポートフォリオには教職員一人ひとりの学生指導件数や内容も記録されるため、教職員の勤務評価に反映することも検討しています。

## 6. 自分の「てっぺん」を見つけてほしい

学生支援の取り組みの三つ目の事例は、「てっぺんフォーラム」です。これは、何らかのきっかけによって大きく成長した学生、大学院生に話をしてもらい、1年生のやる気を引き出そうとする取り組みで、1年生に自分の「てっぺん」を見つけてほしいという願いを込めて命名しました。てっぺんフォーラムの企画・運営は、学生で組織される委員会が行います。教職員も協力しますが、あくまでも企画・運営主体は学生です。

私は長年大学に勤めていますが、近年は何事にも無気力であるように見える学生が増えているような気がします。同僚や他大学の教職員に聞いても、私と同じように思っている人が少なくありません。今日この会場にも、そうお思いになっている方がいらっしゃると思います。ただ、一見やる気がなさそうに感じられる学生も、内には輝くものを秘めているはずで、今までは自分の良さを発揮する機会がなかったため、自分でも燃え上がるきっかけを待っている学生もいるでしょう。今の自分と同じような状況にあった先輩がいかに成長していったかを知ることで、下級生に自分のやる気のスイッチを入れてほしいと考えました。何か興味のあることが見つかれば、達成感を得られれば、学業についても積極的になれるはずです。そうした学生が増えていけば、中途退学や学力不足といった本学の課題を解決する上でも効果が期待されます。

1年次に先輩の話聞いて感動した学生は、4年間の大学生活の大半を意欲的に過ごせるでしょう。そうした学生が3・4年生になれば、今度は自分の経験を後輩に話すために「てっぺんフォー

ラム」に参加してくれるはずですから、プラスのスパイラルが生まれると期待しています。

「てっぺんフォーラム」は2011年度から本格的に始まりました。それまでは、活動が軌道に乗るように教職員がサポートしましたが、今は学生が主体的に企画・運営しています。学生のための活動ですから、その中心には学生がいるべきであると、本学では考えています。

## 7. 継続するためには教職員の力が必要

最後に、今日ご紹介した三つの学生支援事例の課題と展望をお話しします。「ボランティアによる被災地支援」では、参加した学生に人間的な成長が見られる、意義のある活動であると捉えています。ただ、学生にすべてを委ねるのは難しく、継続するためには教職員の力が必要です。「単位不足や欠席の多い学生へのコンタクト・指導」は、地味で時間のかかる業務ですが、退学・休学などを防ぐためには不可欠であると考えています。「てっぺんフォーラム」は、効果を検証していくつもりです。正課外の行事が広範囲の学生にポジティブな影響を及ぼし、多くの気づきをもたらしている可能性が高いと考えられるからです。

本学では、この三つ以外にもさまざまな学生支援事業を行っています。いずれも、担当教職員が変わっても継続されています。それだけ教職員間の引き継ぎに万全を期しているわけですが、個々の学生の成長過程をどの教職員も把握できているかという点では課題が残っています。今後は他大学の事例も参考にさせていただきながら、学生支援の内容をさらに充実させていきたいと考えています。

それでは、「てっぺんフォーラム」を企画・運営している学生に、工夫していること、下級生に対する活動の影響、活動にかける思いなどについて話してもらいましょう。

## 「てっぺんフォーラム」学生報告

### 1. 決して妥協せず、最後まで責任を持つ

文京学院大学学国語学部4年（「てっぺんフォーラム」実行委員会初代委員長）清田里穂と申します。「てっぺんフォーラム」とは、目標を達成した学生に「てっぺん賞」、目標達成に向けて努力している学生に「スイッチ・オン賞」を贈り、表彰者に自分の経験を話してもらうフォーラムです。1年生に努力することの意義を伝え、やる気を引き出すために始まった活動で、これまでにプレ開催を含めて3回開催されました。

私たちが引き出そうとしているのは、学業に対する意欲だけではありません。そのため、部活動で目標を達成した人、達成に向けて努力している人も積極的に表彰し、経験を話してもらっています。活動の企画・運営に当たる「てっぺんフォーラム」実行委員会は、2010年10月、学生22名、教職員16名で発足しました。現在は、全学で50名以上の学生委員がおり、活動に興味がある本学の学生を幅広く受け入れています。委員会は企画部会、広報部会、審査表彰部会、募集部会の4部会から成り、全体会を週1回、各部会はそれ以上の頻度で行います。部会間の連絡のために、書記は各部会の内容を議事録にまとめ、他部会に配布します。

実行委員会には三つの行動指針があります。すなわち、情報の伝達を怠らないこと、現状に満足しないこと、他者に感謝することです。これに加えて、私は委員長として「決して妥協しないほしい」と委員に伝えてきました。実行委員会の活動を続ける中では、モチベーションが下がったり、「てっぺんフォーラム」以外の活動との両立に悩んだりすることもあるはずですが、それ

でも、自分が企画・運営する取り組みに最後まで責任を持ってほしかったからです。「てっぺんフォーラム」は大勢の人の協力があって初めて、開催できます。大変なのは自分だけではないことに気づいてほしいと思いました。

## 2. 幅広い学生の心を刺激したい

「てっぺんフォーラム」はふじみ野キャンパス、本郷キャンパスの両キャンパスでそれぞれ同日に開催します。2011年度は、外国語学部2組、経営学部2組、人間学部5組、保健医療技術学部1組、短期大学1組の計11組、2012年度は外国語学部2組、経営学部3組、人間学部5組、保健医療技術学部1組、大学院人間学研究科1組の計12組を表彰し、学生・院生が発表しました。4年制大学、学士課程という枠を超えて、短大生や大学院生にも発表してもらうことで、幅広い学生の心を刺激できればと考えました。

発表内容を一部ご紹介します。「TOEIC®で高得点を取るために取り組んだ学習について」(外国語学部の学生)、「企業スタッフとして活動する中で社会人のルールを身につけた体験」(経営学部の学生)、「『五街道ウォーク』(東海道、中山道、甲州街道、日光街道、奥州街道の旧道を歩こうと、2年ごとに開催される文京学院大学の取り組み)の準備活動を通して仲間とつながり、交流した体験」(人間学部の学生)といった具合です。

表彰者・発表者は、エントリーシートを実行委員会で審査し、決定します。目標を達成できたかどうかという結果ばかりでなく、達成に向けていかに努力を重ねたかという過程も重視して選考します。エントリーシートは、自薦、他薦を問わず、また本学の学生なら誰でも提出できます。

「てっぺんフォーラム」当日は会場にアンケート用紙を配布します。2011年度の本郷キャンパスでは、372枚のアンケート用紙が回収されました。その回答をご紹介します。例えば、「先輩の発表を聞いて自分も何かに挑戦してみたいと思った」という学生は325名、実に9割近くを占めています。何に挑戦したかを具体的に聞いたところ、本学の英語施設「チャットラウンジ」に通いたいという声が目立ちました。このように、多くの学生を「自分も何かを始めよう」という前向きな気持ちにさせることができ、「てっぺんフォーラム」に取り組んできてよかったと実感しました。しかし、現状に満足しては、さらなる発展はありません。「てっぺんフォーラム」はもっともっと充実した取り組みになると、私たちは考えています。

## 3. 4年間の大学生活で最も大きな誇りに

向上心を抱く学生を1人でも増やすために、開催時期や審査方法の見直し、教職員と学生の綿密な連携、認知度を上げるための広報活動など、委員から出された反省点を改善していくつもりです。話を聞いてくれた学生に対するアフターフォローを始める予定もあります。また、取り組みを継続させるために、4年生から下級生への引き継ぎにも万全を期したいと考えています。

私は、「てっぺんフォーラム」実行委員としての活動に、4年間の大学生活で最も大きな誇りを感じています。大勢の人の前で話すこと、さまざまな意見を一つにまとめること、誰かに指示を出すことなど、初めて体験することがたくさんありました。正直、戸惑うこともありましたが、粘り強く取り組んで乗り越えられたと思います。私のやる気のスイッチは、実行委員になった時に「オン」になったのです。また、数えきれないほど多くの人に、支えていただきました。これからも、他者への感謝を忘れず、人とのつながりを大切にしていきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

## 初年次からの多様な学生 支援と教職協働

文京学院大学の取り組み事例

平成24年9月5日  
文京学院大学  
本郷キャンパスディレクター  
森村 幸夫



1

## 発表の構成

1、文京学院大学の紹介

2、学生支援

事例1) ボランティアによる被災地支援

事例2) 単位不足や欠席の多い学生へのコ  
ンタクト・指導

事例3) てっぺんフォーラム

3、課題と展望

2

## 文京学院大学の紹介 文京学園の歩みー自立と共生

- 1924年 創立者 島田依史子が島田裁縫伝習所を開く
- 1927年 本郷家政女学校に名称変更
- 1935年 本郷家政女学校を本郷商業家政女学校に名称変更
- 1947年 本郷商業家政女学校を文京女学院に名称変更
- 1947年、文京学園女子中学校を開校
- 1959年 文京女学院医学技術専門学校を開校
- 1964年 文京女子短期大学を開学
- 1991年 文京女子大学開学。経営学部を開設。
- 1997年 文京女子大学人間学部および文京女子大学大学院を開設。
- 2001年 文京女子大学外国語学部を開設。
- 2002年 「文京学院大学」と校名を変更。
- 2005年 大学全学部を男女共学に。
- 2006年 保健医療技術学部を開設、短期大学も男女共学
- 2009年 創立85周年



3

## 大学の学部構成・規模(学生数)

経営学部		1,010	本郷	
人間学部	コミュニケーション	249		
	社会学科			
	児童発達学科	523	1,553	ふじみ野
	人間福祉学科	415		
	心理学科	366		
外国語学部		904	本郷	
保健医療技術学部	理学療法学科	351		
	作業療法学科	158	875	ふじみ野・本郷
	臨床検査学科	366		
短期大学		151	本郷	
総計		4,493		

(2012年5月1日現在)

4



ふじみ野キャンパス(埼玉県ふじみ野市)

5



Hongo Campus

6

## 事例1 ボランティアによる被災地支援 (1)内容

- 学生の間で、ボランティアとして被災地支援を行いたい、交通・宿泊の手配を含めどうしてもわからないという声が多かったため、大学で企画を立てた。
- まず、職員で現地視察・ボランティアの経験をし、現地の状況把握、宿泊先状況、安全性の確認、手配の仕方を確認した上で、学生に案内を行った。
- 大学企画のボランティア派遣を7件実施したが、各回とも募集人数をはるかに超える希望者があった。また、心ある学生は、震災直後より自主的に多くのボランティア活動をしており、計12件に上っている。平成23年度の活動として、主だったボランティアでも19件を実施し、延べ1044人の参加者。
- 本学では長期の支援を考えており、最低5年間実施する計画。
- 今後は、「ガレキの撤去」から「心のケア」への移行

7

## (2) 効果

- 第一に、学生達は、日本で起きた大震災を実際に目にする事で、自分達の在り方や今後の人生について考えるきっかけとなった。
- 第二に、学生達は、互いに助け合うことの大切さを学ぶことができた。
- 第三に、大学のボランティア参加がきっかけとなって、個人レベルでもボランティアに参加したいという学生が増えた。
- 特に、教科の一環としてではなく、純粋なボランティア活動で、学生達の成長を目の当たりにすることができ、私達教職員も報われたという思いが強い。

8



9

## 「学生の自主的な活動」

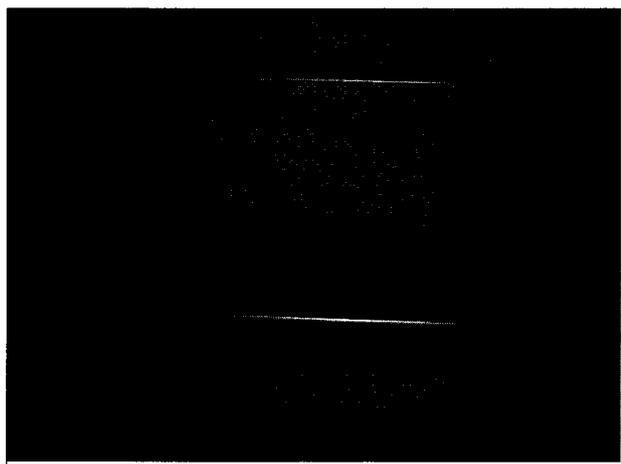
(活動の一部)

## 東日本大震災を通じて

【ランドセル大作戦】

環境教育研究センター

10



11



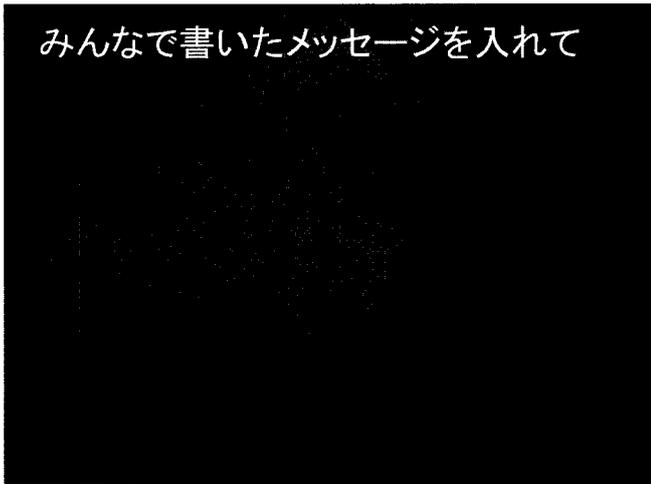
12



13



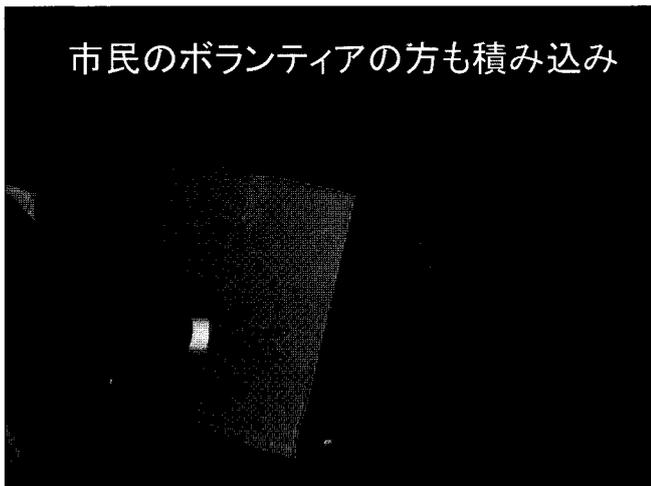
14



15



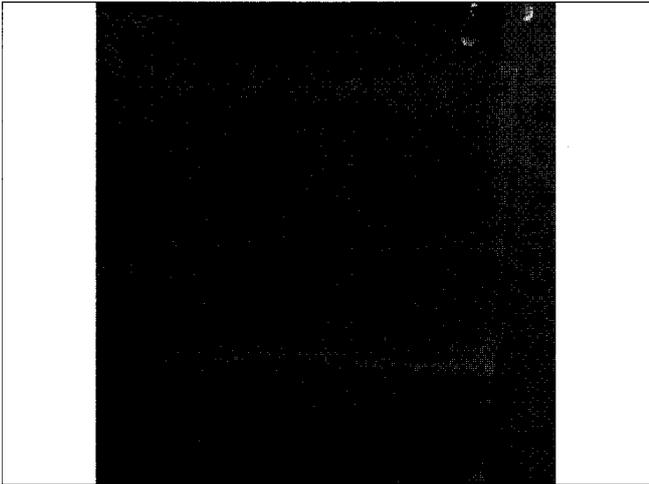
16



17



18



19

様啓 春寒の候、ますます清料のごことお慶び申し上げます  
 さて、このたびの東日本大震災に際しまして、心温まる支援  
 の品々を賜り深く感謝申し上げます。  
 お寄せいただいた支援の品々につきましては、被災された  
 方々に届け、生活を再建されている方々にとりましては  
 大きな励みとなっております。  
 市いたしましたは、皆様のおかげに、励みに、一日も  
 早い復興に向け、全力で取り組んでまいりますので、今後とも支  
 援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。  
 ここに、このたびの御厚情に対しまして唯儀ながら書中を  
 もって御礼申し上げます。皆様のお喜びの御座ると  
 ご活躍をお祈り申し上げます。  
 平成二十四年二月二十日  
 乳仙沼市長 菅原 茂  
 謹白

20

### (3) 学生達の感想文より

- 「このボランティアに参加しなかったら私はこの現実を知ることはなかったかもしれません。メディアや人から聞いた話では限界があります。現地に行き、直接自分の目で見て、聞いて、感じる事が出来たことを自分の人生で生かしていきます。」
- 「文京学院大学の定期的な被災地支援ボランティアは、前々から興味があり、こんなに他の人も頑張っているのだから自分も何か出来ることをしたいと考えていた。しかし、なかなか一歩踏み出せずにいた。そんな時同じ学科の友人に誘われ今回のボランティアに参加しました。」
- 「私に出来ることは小さく、限られているかもしれませんが、しかし小さくても力になれることも分かりました。そのため今後も小さな力であっても私が出来る限りのことを見つけ、行動できるようにしたいと強く思います。」
- 「被災地に行って、まさに人は支え合って生きていることを感じる事ができた。」

21

- 「帰る家があること、温かいお風呂に入れること、布団で寝られること、ご飯が食べられること、学校に行けること、家族・友達がそばに居ること、当たり前と感じている日常生活がどれほど大切なことが改めて実感した。それと同時に自分と関わっている人たちに感謝し1日1日大事に過ごしたい。」
- 「今回のボランティアでは、文京以外にもたくさんの団体が参加していて、個人的に長期に参加している方や、外国から来て参加している方もたくさんいた。その人たちと作業する中で、時間がたつにつれて、どんどん思いが一つになっていくのを感じた。外国の方が英語で話していて初めは何を伝えたいのか分からなかったが、言葉が理解できなくても次第に何を伝えたいのか理解できるようになってきて、一致団結して作業をすることができた。」
- 「この経験は絶対に将来何らかの役に立つと思うし、人生の貴重な経験になります。私たちはちっぽけなことしか出来ないけれど、気持ちが大切です。行動しなければ何も始まりません。これからは何事も積極的に行動したい。」

22

### (4) 問題点・課題

- モチベーションの高い学生と低い学生が混在するため、ボランティア先で、大変気を遣った。
  - モチベーションの低い学生に参加させない事はもともと難しい。
  - 加えてモチベーションの高低は現地に行って始めて判明することが多かった。
- ボランティア先に対しては、「親切の押し売り」とならないようにする配慮が必要。事前学習の徹底が重要でこれには手間と時間を要した。
- 一時的な感動や問題意識とならないための方策が重要。

23

### 事例2) 単位不足や欠席の多い学生へのコンタクト・指導

- 背景
- 不本意入学
  - 学習意欲の喪失
  - 人間関係の悩み
- 連絡、面接・指導の対象者
- 履修期間内に履修登録を行わない学生
  - 成績不良学生
  - 多欠者
- 1年生については、以下の学生に連絡、面接・指導
- 履修登録期間に履修登録を行わない学生
  - 1年生の必修科目への欠席回数が多い学生
  - (各学部では、出席状況の悪い1年次の学生約20~40人について、電話でコンタクト→1年次前期時点での退学者減につながっている。)

24

## 効果・問題点

### 効果:

- この連絡がきっかけになって授業に出席するようになった例も少なくなく、退学率の増加抑制に役立っている。

### 問題点:

- 日中に連絡が取れない学生が多い(通常の職員の業務時間内に連絡を取れない)。
- 成績不良の場合、保護者が電話に出た時、どこまで話すか
- 学納金延滞の場合、親より子供に話さないでくれとの依頼を受けることもある。(込み入った事情が背景にあるケースもあり、どこまで踏み込めるか。)
- 個別案件の解決までには相当の時間と労力が必要。

25

## 情報共有の試み

- 教職員が、指導・コンタクト情報を共有することに大きな意味があると考えられることから、経営学部についてはすでに稼働している電子ポートフォリオに新しく組み込むこととした。
- 電子ポートフォリオでは、情報共有をはじめ様々なデータを収集できる。指導件数・内容を把握することで、指導にあたった教職員の評価に加えることも可能になる。

26

## 事例3) てっぺんフォーラム

### 1) 内容

- 何らかのきっかけで大きく成長した上級生の姿を見せ、下級生が感動・勇気をもって「スイッチオン」し、自分の「てっぺん」を見出すことを期待するものである。
- 学生の委員会がフォーラムの運営にあたり、選考基準を設けて応募した学生の中から候補学生を選抜する。
- 教職員もフォーラムの運営に協力するが、あくまで主体は学生の委員会である。

27

## 2) 背景

- 近年なんとなく生きていく、つかみどころのない、やる気のないように見える学生が増えていることを大学関係者は実感していることと思います。
- しかし、そういった学生たちは、全くダメなわけではなく、いいものを持っているが、きっかけが無く発揮できないでいる。自分でも燃え上がる機会を待っている。

28

28

### 3) 目的・意義

- そういった学生たちに、同じような状況から「あるきっかけ」により成長した先輩に、経験を語ってもらい、学生達の心に感動や勇気を与え「スイッチオン」を促すものである。

てっぺんフォーラムの開催  
・各学部・学科の成功例の紹介  
・各自の成長の過程を語る  
・夢中になってやり遂げた充実感



「憧れ」の先輩＝スイッチオン  
下級生に、上級生の活躍、生き方、学び方を見せることで、下級生は目標を持って、それに近づこうとする。スイッチが入ることを期待。

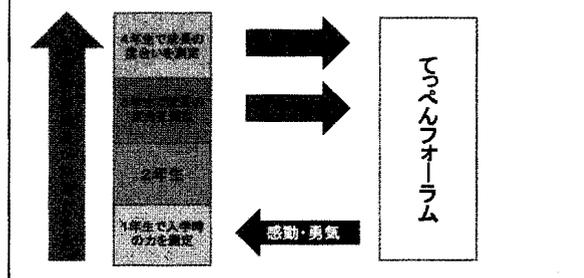
- 1つのことにやる気を出せば、学業についても積極的になり、大学が抱える不本意入学、中途退学、学生満足度、学力不足、就職問題、他の色々な問題も解決することが期待できる。

29

29

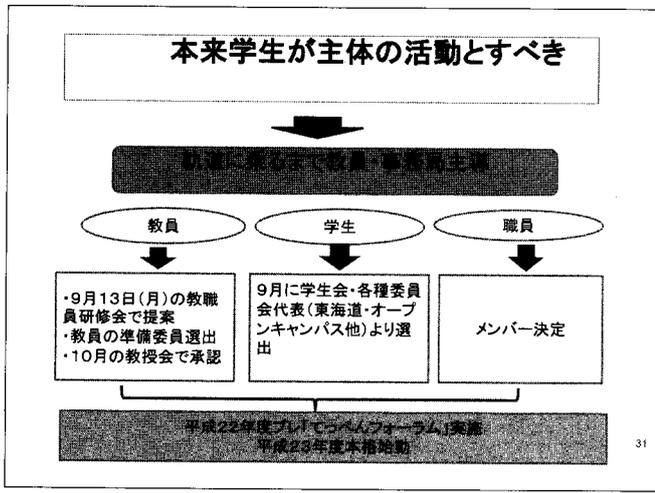
## 概念図

### てっぺんフォーラムと在学生との関係



30

30



31

### 3、 課題と展望

今日取り上げた3件についてももう一度振り返って見よう。

- 被災地のボランティア活動では、経験した学生達の成長が大きな励みになっているが、被災地で受け入れられる活動を継続するには、職員の力は必要である。
- 多欠者等への連絡は、地味で時間のかかる業務であるが、退学・休学等を防止するには欠かすことができない。
- 「てっぺんフォーラム」のような正課外での行事が広範囲の学生にポジティブな影響を与え、気付き(スイッチON)を与えている可能性が強く、効果の検証を続けていきたい。

32

### 3、 課題と展望

- 本学では、これらの様々な学生支援が担当者の交代をきっかけに途絶えるといったことは起きていない。
- しかし、正課外、正課を通して様々な局面で学生が成長していく様を教職員が共有できているか、という点では課題が残っている。
- 他大学の例も参考にさせていただきながら、学生支援の内容をさらにレベルアップさせていきたい。

33

### 学生からの発表

「てっぺんフォーラム」を企画・運営している学生に話をしてもらいます(清田里穂 てっぺんフォーラム前委員長)。

- 工夫している点
- 聴衆である下級生の学生達に与える影響
- この活動にかける思いなど。

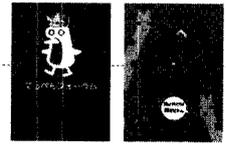
それでは、よろしくお願いします！

34



1

てっぺんフォーラムとは...

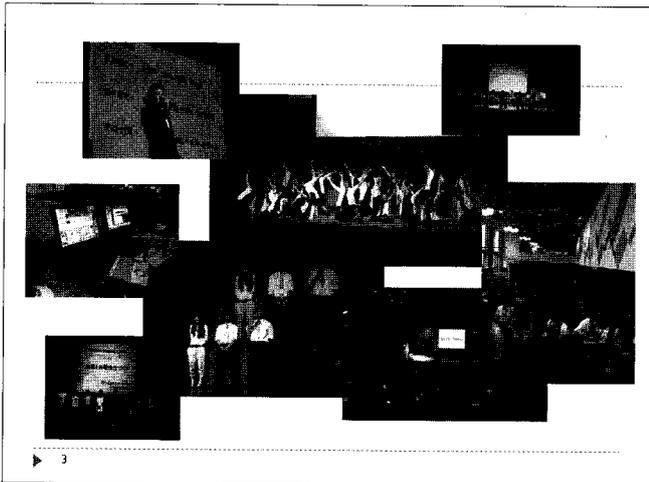


■めざせ！教育力日本一

- ▶ 「てっぺんフォーラム」とは、自らが立てた目標を達成した学生に与えられる「てっぺん賞」、および目標に向かって努力途上の学生に与えられる「スイッチ・オン賞」を後輩たちに披露する発表会です。
- ▶ 大学生活の4年間は学力の向上だけでなく、「マインド」、「スキル」、「応用力」を伸ばす必要があります。
- ▶ フォーラムでは、学生たちが在学中に学び、培った経験を学習成果のプレゼンテーションやパフォーマンスとして披露しています。

▶ 2

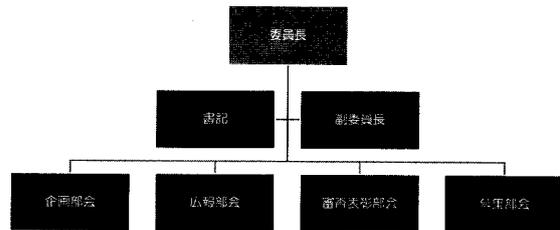
2



▶ 3

3

委員会構成



▶ 4

4

行動指針

- ▶ 情報の伝達を怠らないこと
- ▶ 満足しないこと
- ▶ 人に感謝すること

▶ 5

5

発表者の先輩方

▶ 2011

【本郷】  
外国語学部 2組  
経営学部 2組  
短期大学 1組

【ふじみ野】

人間学部 5組  
保健医療技術学部 1組

計11組

▶ 2012

【本郷】  
外国語学部 2組  
経営学部 3組  
保健医療技術学部 1組

【ふじみ野】

人間学部 5組  
人間学研究科 1組

計12組

▶ 6

6

## 発表例

- ▶ TOEIC高得点獲得を目指した学習例(外国語学部)
- ▶ 企業スタッフとして活動する中で社会人のルールや社会自体を学んだ例(経営学部)
- ▶ 「新・文明の旅」プロジェクトでトルコを訪問し、エイズのプレゼンを行う一方現地病院で医療の説明を聞き感動した例(保健医療学部)
- ▶ 「五街道ウオーク」準備活動を通じて仲間とつながり・交流が(人間学部)
- ▶ 福島県郡山市逢瀬町産の野菜代行販売から自分が出来ることを考え行動した例(人間学部)

▶ 7

7

## 選考基準

- ▶ エントリーシート提出

- ・「一番」でなくてもよい
- ・伝えたい、披露したい。という気持ち
- ・自らの気付きが見えるもの

⇒実行委員会で審査を行う

▶ 8

8

## 聴衆の声

学部	1年生	他学年	計	合計
経営学部	178	1	179	372
外国語学部	158	1	159	
短期大学	33	0	33	
学部不明	0	1	1	

(2011年度)

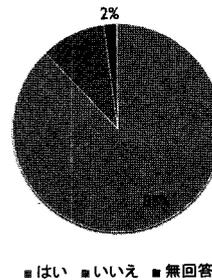
▶ 9

※本部キャンパス

9

## 聴衆の声

自分も何かに挑戦してみたいと思いましたが？



### 【具体的な意見】

- チャットラウンジに通う
- 海外留学をする
- 資格取得をする
- 東京国際アニメフェアに参加する
- ボランティア活動を行う
- 生活のリズムを改善する
- 好きなことを見つける
- 多くの本を読む
- TOEICのスコアアップを目指す
- 色々な国へ行き、視野を広げたい
- 企業の方や様々な人と交流する

(2011年度)

▶ 10

※本部キャンパス

10

## 課題

- ▶ より良いてっぺんフォーラムを作るために
  - ・開催時期、審査方法の見直し
  - ・教職員と学生の密度のある連携
  - ・認知度向上
- ▶ 「気付き」から「スイッチオン」、そして「てっぺん」へ
  - ・開催後のアフターフォロー
  - ・行動検証

▶ 11

11



▶ 12

12